ご期待ください。久々の英雄交響曲。

今度の定期は 6 月 8 日、京都コンサートホールです。

第 107 回定期演奏会にむけて 。

2012 年春の定期は立響久々の英雄交響曲を中心にワーグナーの序曲などドイツ物の重厚なプログラムとしました。客演指揮はおなじみの大河内雅彦氏。ウィークデーですが週末の金曜日です。皆さまお誘い合わせの上、京都コンサートホールへお出ましください。団員一同、心よりお待ち申し上げております。

立命館大学交響楽団第 107 回定期演奏会

日時：6 月 8 日(金)　18 時開場　19 時開演
会場：京都コンサートホール・大ホール
指揮：大河内雅彦(客演)　高倉寛人(学生)
曲目：ワーグナー　歌劇『タンホイザー』序曲
ベートーヴェン　バレエ音楽『プロメテウスの創造物』序曲
ベートーヴェン　交響曲第 3 番変ホ長調『英雄』

■大河内雅彦氏プロフィール

愛知県立岡崎高校を経て、東京芸術大学器楽科卒業。2002 年 4 月より東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の指揮研究員として飯守泰次郎・矢崎彦太郎両氏のもとで研鑽を積む。同団副指揮者を経て、2007 年 6 月より、東京シティ・フィルのアソシエイト・コンダクターに就任。この間に同団の 100 回公演を指揮。またこれまでに、広島交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、大阪市音楽団、シエナ・ウィンドオーケストラ、仙台フィルハーモニー管弦楽

響楽団、九州交響楽団、東京都交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪シンフォニカー交響楽団を指揮。

指揮をハンス・グラーフ、カール・エステルライヒャー、湯浅勇治、小松一彦、広上淳一の各氏に師事。第 49 回ブザンソン国際指揮者コンクール　セミ・ファイナリスト。2006 年度より上野学園大学音楽文化学部非常勤講師（オーケストラ・管打合奏）を務める。またこれまでに、多くのアマチュアオーケストラにも関わってきており、慶應義塾ワグネルソサエティーオーケストラ、アンサンブル・コンソルテ、新交響楽団等を指揮・指導している。

立響楽信 34

2012. 05

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学交響楽団　ruso_info@yahoo.co.jp

■演奏曲誌上プレビュー

リヒャルト・ワーグナーは、中期ロマン派を代表するドイツの作曲家である。1813 年ライプツィヒで生まれ、音楽好きの家庭に育ち、15 歳の時ベートーヴェンに感動し音楽家を志す。このころ、一家とも親交があったウェーバーから強い影響を受ける。ウェーバーはモーツァルトによるドイツオペラの伝統を継承し、自らの『魔弾の射手』によってドイツロマン派のオペラ様式を完成させた作曲家であった。ワーグナーはその流れを受け継ぎ、1840 年代より『タンホイザー』『ローエングリン』『ニーベルン

グの指環』などオペラを次々と発表する。ワーグナーは、オペラを書くにあたって新しい手法をいくつも用い、オペラを「楽劇」と呼ばれる一段階上の次元へと発展させた。その功績から、彼が生きた時代から現在に至るまで「ワグネリアン」という、彼を崇拝する熱狂的なファンが存在する。日本では三島由紀夫、松本零士、宮崎駿などの著名人がワグネリアンを自称している。　『タンホイザー』は、ワーグナーが33歳の時に書いたオペラである。主人公である中世ドイツの騎士タンホイザーは、エリーザベトという最愛の妻がありながらも、快楽の世界ヴェーヌスベルクの女神であるヴェーヌスに心を奪われてしまい虜になっていた。当時のドイツではキリスト教が強く信仰されており、浮気は最も汚らわしい行いのひとつとされていた。タンホイザーが四苦八苦しながらもヴェーヌスからの誘惑を振り払い、改心していく様が劇を通して描かれている。

今回演奏する序曲は、数多くのワーグナーの作品の中でも常に高い人気があり、オペラの幕開きにふさわしく、曲想に重厚さと軽快さの双方が具わっていてバランスが良い。その上、ABA'の3部形式になっており、耳が把握しやすくなっていることも、長年人々から愛される理由であろう。冒頭は4分の3拍子、クラリネット・ホルン・ファゴットからなる管楽器アンサンブルになっている。「巡礼の合唱」とも呼ばれているこの旋律は、劇中でも度々合唱により歌われる。次いでチェロによって歌いだされる旋律は「悔悟の動き」と呼ばれるもので、劇中タンホイザーが巡礼達の歌に感動して歌う祈りの歌に使われている。やがてヴァイオリンに小刻みな動きが現れるが、これは巡礼達のひたむきな意思、心の高まりを表しているととらえることができる。巡礼が終わった途端、ヴィオラによる軽やかな旋律が現れる。これは「誘惑の動機」と呼ばれ、ヴェーヌスベルクの雰囲気が感じ取れる。この旋律に新しい刺激的な動機も加わり、木管楽器とヴァイオリン・チェロの奏でる旋律で曲は最高の盛り上がりを見せる。タンホイザーがヴェーヌスの甘い囁きに我を忘れて歌い上げる場面である。このまま高らかに続くのかと思いきや、再びヴァイオリンの小刻みな動きが現れ、曲は再び厳かな雰囲気へと変わっていく。終盤、トロンボーンによる「巡礼の合唱」が盛大に鳴り響き、天に召されるような全ての楽器が奏でる和音で曲は終わりを迎える。

ぜひ、タンホイザーの心の移り変わりを味わいながら聴いていただきたい。序曲が終わるころには、あなたもワグネリアンになっているかもしれない。(文責　副学生指揮者・藤本直也)

ベートーヴェンは生涯において二つのバレエ音楽を残している。そのうちの一つがこの**『プロメテウスの創造物』**である。当時のウィーンで名ピアニストとして、また作曲家としても活躍しはじめていたベートーヴェンであるが、管弦楽曲の作曲に取り組み始めたのは30歳直前と比較的遅い時期であった。それほどまでに自らの真価を問われるこの分野に慎重であったベートーヴェンであるが、交響曲第1番で成功するやいなや、舞台音楽の分野でもこの「プロメテウスの創造物」によって大成功を収め、華々しい管弦楽曲の作曲家としてのデビューを飾るのである。そのような中でつくられたこの序曲は、ベートーヴェン特有の重厚さや壮大さとともに、モーツァルトをも感じさせるベートーヴェン初期の要素が凝縮された魅力をお楽しみいただけることだろう。

強烈な二つのEs-Durから始まる冒頭、チェロから全体へと受け継がれる主題、まさにその名の通り**『英雄』**の勇ましさを感じるとともに、いささか旅の始まりにも似た高揚感を感じさえもする。いや、それはまさにベートーヴェンの思い描いた革命後の民衆による社会への力強い旅立ちであるとともに、その後の音楽界の新たなる世界への、船出のファンファーレであったのではないだろうか。

もともとはフランス革命の精神に共感し、ナポレオンへ捧げるために書かれたこの交響曲であったが、ナポレオンの皇帝への即位を聞き、激怒のあまりその表紙を破り捨ててしまったという逸話は有名である。この逸話がこの交響曲を『英雄』と呼ぶこととなった所以であるが、それほどまでにナポレオンに自らの夢を託し、さらに

はそれを裏切られたベートーヴェンの心の内はどのようなものであったのだろう。後に「一人の偉大な人間の思い出を記念して」と書き直された副題からもわかるように、当時の貴族社会への不満とそれを打ち破ろうとする熱い精神を、この曲の随所からうかがうことができるだろう。また、ベートーヴェンは三十代半ばにして聞こえなくなっていく自身の耳のことで絶望に陥り、後に有名となる「ハイリゲンシュタットの遺書」を書くこととなる。しかし自らその絶望を乗り越え、直後に書かれたこの交響曲の中にその英雄性を表現しようとしたのである。それを考えると、単なる勇ましさだけではないベートーヴェンの心の奥底の哀しみとともに、それに打ち勝つ精神力を聞いているかのようにも思えてくる。またこの交響曲は、本プログラム第一曲目、バレエ音楽『プロメテウスの創造物』の終曲のテーマが第４楽章の主題となっていることでも有名である。さらには第二楽章の葬送行進曲が英雄プロメテウスの死を表しその復活を描いているという説もあるように、自らやその周りの境遇を、英雄プロメテウスに重ね合わせて表現しているとみることもできるのではないだろうか。

この交響曲の魅力はそれだけにとどまらない。それまでの交響曲にとらわれない曲の長大さに始まり、第１楽章の極端に短い序奏や第３楽章のスケルツォの確立といった当時としては斬新な試みが、当時の人々にどれほど強烈に印象付けたことか、そして後世の音楽家にどれほど影響を与えたことか。それほどまでに、音楽界の歴史を変えたのがこの交響曲なのである。そんな若きベートーヴェンの熱い思いを感じながら聞いていただければ幸いである。（文責　学生指揮者・高倉寛人）

立響の大分公演が決定しました。

2013 年、立響が大分市で演奏会を開くことになりました。これまで立響は３回九州公演を行っていますが、今回は福岡市(1991 年)、別府市(1998 年)、大分市(2000 年)に続く４回目 13 年ぶりの九州公演、そして前２回と同じく立命館アジア太平洋大学(APU)が立地する大分県での開催となり、これまで以上の APU の学生たちとの交流も期待されます。

このたびの大分公演は立命館大学の課外活動支援強化策の一環として実現するもので、立響としては将来の東京公演や海外公演などにつながるものとして位置付け、引き続き楽団活動の強化に向けて取り組んでいきます。

大分公演には、ミュージカル・アドバイザーの阪哲朗氏も賛同の意を示され、忙しい海外での活動の合間を縫って立響の指揮をしていただくことになりました。演奏会は 2013 年２月 27 日。

第 107 回定期以降の立響と関係団体の演奏会です。

衣笠交響楽団演奏会（第 20 回記念）

日時：7 月 28 日（土）　19 時開演
会場：京都コンサートホール・大ホール
指揮：宮村聡　伊藤和夫
曲目：オッフェンバック　喜歌劇「天国と地獄」序曲　スメタナ　連作交響詩「我が祖国」よりモルダウ　リヒャルト・シュトラウス　交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」ブラームス　交響曲第４番ホ短調作品

立命館大学交響楽団サマーコンサート 2012

日時：9 月 2 日（日）　19 時開演
会場：門真市ルミエールホール・大ホール
指揮：阪　哲朗
曲目：未定

立命館大学交響楽団第 108 回定期演奏会

日時：12 月 17 日(月)　19 時開演
会場：びわ湖ホール・大ホール
指揮：阪　哲朗
曲目：未定

立命館大学交響楽団大分演奏会

日時：2013 年 2 月 27 日(水)
会場：iichiko グランシアタ
指揮：阪　哲朗
曲目：未定

＊詳細は HP 等でご確認ください。

ＯＢ会費が改訂されました。

前号でお知らせしましたように、本年度より OB 会年会費をこれまでの 3,000 円から 5,000 円に改訂いたしました。会員各位におかれましては、何卒ご理解とご協力をお願いいたします。また、ゆうちょ銀行の「郵便自動払込」を進めています。ゆうちょ銀行へは、他の金融機関支店・ATM(コンビニ等を含む)からの振り込みも可能です。振り込みの際には、卒業年を確実に記載してください。→ 振込先　ゆうちょ銀行店番 448 普通預金　39306461 立命館大学交響楽団 OB 会

創立 60 周年記念事業委員会が立ち上がりました。

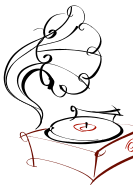
立響は平成 26(2014)年に創立 60 周年を迎えます。OB 会では 60 周年を立響および OB 会活動の一層の発展を願い、創立 60 周年記念事業を計画しています。OB・OG におかれましては積極的なご参加をお願いいたします。実行委員長には副会長の西田廣士常任理事が就任されました。

ＯＢ総務のアドレスができました。

このたび立響 OB 会専用のメールアドレスを開設いたしました。OB・OG の皆さまにおかれましては、住所変更等ご連絡に是非ご利用ください。立響 OB 総務が運用いたします。今年度の OB 総務は早瀬昌子さん(文３　Vn.) です。obsoumu.ruso@gmail.com

メーリングリストにご登録ください。

別紙のご案内にある通り、寺田卓也常任理事にご尽力いただき、会員相互の情報共有や交流を一層促進するためメーリングリストの運用を始めました。　→　寺田理事　sibelius.nr.5@gmail.com



好・評・連・載

吉田興三郎のレコード棚

ベートーヴェン　交響曲第 3 番変ホ長調作品 55『英雄』

僕なりのベスト 10 をあげます。(演奏、録音を五分五分とします)

①チェルビダッケ／シュトゥットガルト放送管弦楽団（1980 年頃　ライブ　海賊盤）②クレンペラー／フィルハーモニア管弦楽団　(1959 年スタジオ録音)③フルトヴェングラー／ウィーンフィル(1944 年　放送ライブ)④同／ルツェルン祝祭管弦楽団 (1953 年　ライブ) ⑤同／ベルリンフィル(1950 年　ライブ)⑥Ｊ・ヨッフム／北ドイツ放送管弦楽団(1979 年　ライブ　海賊盤)⑦フルトヴェングラー／ベルリンフィル(1952 年 2 月 7 日　ライブ)⑧同／同 (同年 12 月 8 日　ライブ) ⑨R・ノリントン／ロンドン・クラシカル・プレーヤーズ(古楽演奏)　⑩B・ワルター／シンフォニー・オブ・ジ・エア(旧ＮＢＣ交響楽団で 1957 年　トスカニーニ追悼演奏会)　次点　＊Ｊ・セル／クリーブランド管弦楽団)　＊カラヤン／ベルリンフィル（1962 年　スタジオ録音）～カラヤンはたくさんの録音があるが、これがベスト。

大変に立派な演奏は①②と次点の二つ。①は英雄の主題や変奏の描き分け等、指揮者が徹底的に決めている。カラヤンも同じことをしているが、極め方の度合いが違うのである。③は 1953 年にイタリアのレコード会社「ウラニア」から出され“ウラニアのエロイカ”として注目されたが、フルトヴェングラーが訴えたため発売中止になった曰く付きの音源です。何枚かは発売されたので中古ＬＰ市場で 15～20 万円ほどしています。この音源はいろいろなレーベルからＣＤが出ており、ＬＰレコードからの焼き回しも発売されており録音状態も良い。ドイツ敗戦の一年前の演奏会で、この頃にはドイツでは磁気テープが発明されていたので録音状態も極めて良い。フルトヴェングラーはこの曲を得意にしており、9 種類の演奏がＣＤとして発売されている。演奏だけとれば③が最高であり、彼は 1 年に一度成果を問うアマチュアと同じ心構えを忘れなかった。オーケストラ団員のやる気満々な演奏が凄い！本当に凄い！　すぐに手に入るので是非とも聴いてみてください。第 1 楽章冒頭の二つの和音があのように響くことは決してないと思います。フルトヴェングラーによる曲の開始は常にものものしい。その凄まじいアインザッツ等々、我々は彼の術中にハマるのである。⑦⑧は 1 日違いの演奏ですが、違った感動があります。

この曲で僕が一番好きなところ、それは第 1 楽章のコーダ！　ホルンが主旋律で第 1 ヴァイオリンが細かいオブリガート風の対旋律、次のセコバイ…失礼、 第 2 ヴァイオリンが対旋律を奏でるところが最高で、次の次がトランペットが高らかに主題を歌うファンファーレになります。

さて、第 2 次世界大戦前後はベートーヴェンのオーケストレーションが下手というのが通説で(ファゴットはかなりのものと思いますが…)、ほとんどの指揮者は楽器の使い方を変更したものです。メトロノームの指示も早すぎるため、ベートーヴェンが使用していた機械が壊れていたとされていました。作曲者の指定通りの演奏が行われるようになったのはごく最近のことで、古楽器の指揮者たちが先駆をつけたのです(例外はトスカニーニで楽譜の指定通りのテンポで演奏しています。但し楽器の使い方は改訂しています)。

しかし現在でも、古楽器の指揮者以外の大半が改訂演奏するところが先のトランペットによるファンファーレの部分です。オリジナルの楽譜ではトランペットが途中から、実に変なところかでなくなってしまい、ホルンと木管が 8 分音符の刻みで引き継ぐのですが、音量が弱いために、大事な主題が突然行方不明になるのです。1950 年代でもＨ・シェルヘン や Ｐ・モントゥーがオリジナル楽譜で演奏していますが、ベートーヴェンは何故こんな不自然なことをしたのでしょうか？　アーノンクールは「英雄の破滅を表現したものだ」と言っていますが…。

吉田興三郎（S46 Tb. 箏演奏家）

ご冥福をお祈りいたします。

野川　順一　様（Vn）　　2011 年 11 月 18 日